

---

# 第59回技能五輪全国大会(東京大会)を 振り返って

配管職種競技委員 渡邊弘幸  
(東京都管工事工業協同組合)

---

2年続いた愛知開催から今年は東京ビッグサイトに場所を移し、第59回技能五輪大会が今年も無事開催されました。準備段階では第五波の新型コロナ感染拡大下で行った関係で、実施時期には感染状況もだいぶ落ち着いたものの、無観客での開催となった事は致し方なかったかと思えます。会場では選手間の距離を多くとり、集合時などにはマスクや消毒の徹底を御願ひするなどの感染予防の工夫の他、ワクチンの接種証明を必須にするなどの対策と共に多くの関係各位のご尽力により無事開催できた事は大変喜ばしいことです。参加人員は今回44名(女性選手3名)の選手が全国から集まりました。この困難な時期に多くの練習時間をさいて技術を磨き、日本全国より多くの選手が参加して頂いたことは選手の皆さんだけでなく、この競技に送り出した企業や学校関係の皆様のご協力あつてのことで、改めて主催の中職能の役職員の皆様を含め関係各位に御礼申し上げます。



競技説明を行う筆者

たいと思えます。

本年の課題は、大きく変えたことが一つあります。それは給水及び給湯管の経路上に配管貫通穴を設けた隔て板(実際の建築配管で遭遇する間仕切り越え)を設けたことが大きな特徴です。

これに至る理由は私が競技に関係者として関わるようになって競技を見る度に思った疑問からです。私が最初に技能五輪を見たのが第56回の沖縄大会からですが、その時以来感じていた違和感は、私が実際に自ら配管作業に携わっていた時期があり、現場でやってきた配管組立手順と異なる特異性からでした。多くの



未来を担う若年技能者

選手が多くの部分の配管を作品取付板の部分で作らず、床に置いたVブロックや耐火煉瓦、耐火板などの上で作っており、そっくり組み立てた後に（給湯管ではチーズ先の配管や下手するとバルブや止水栓まで）ごっそりまとめて固定して行くという手法がとられているのに驚きました。配管職種というのに、いつの間にか実際の現場で行う建築配管とは乖離した「技能五輪用の手順」になっているように感じたことです。競技場所という現場とは違った特殊性や好成績の選手が使う製作手順の影響も有ると共に、そのような現実離れした手順を許している課題そのものにも要因があったと思います。

立ち戻って建築配管で大切な事の一つに器具や止水栓などへの接続部分の位置が正確で有ることです。しかしながら、作品取付板へきちんと位置を出しながら、その墨とずれている作品が多くあります。原因はVブロックの上でそっくり作品作って取り付けていると、一部の精度不良があったとき、最後の配管部分で正規の位置に戻すなどの作業が出来ません。大切なのは末端の位置の正確さです。課題を測定していて混合水栓の配管位置やバルブの高さ、止水栓の高さなどが不正確なのは何が大切かを誤解されているからでは無いかと思います。どんなにきれいに隠蔽部の配管をしてもタイルの目地に合っていない水栓や止水栓・バ

ルブ等では何にもなりません。末端を大切に配管するにはきちんと墨を出し、その墨に末端器具の位置が合うよう配管する事です。そのためには途中の誤差が末端に及ぶような配管方法は建築配管ではふさわしくありません。「隔て板」(間仕切り壁などを想定)の効果ですが課題が公開されたときは戸惑われた事と思います。しかしながら、競技で選手達が作品を作る過程を見るとスタートの鉄管部分から末端に向けて器具へ素直に順々に作品取付板の上で配管を組立している選手が多かったのが印象で期待していたような効果が出ていると思いました。多くの配管工さんは現場ではこの手順で仕事をしていると思います。今回は隔て板を取付するのが最初なのでパイプの通る部分の直径は100mmと大きめにしました。それでもそっくり作ってしまい取付だけという手法はかなり制限され、本来の建築配管の手順に近づいたと思います。

このほかにも今回の課題図の中に競技を実施する側からのメッセージを載せました。良く読み、何が大切なのか「大切に無い物は何か」、特に採点する側の情報が全て開示されているわけでは無い事から「大切に無い事」がさも大切であると「競技用の誤った常識」が形成されているようですので、「必要な事・大切な事」を重点的に「競技用の誤った常識」にはその正当性を十分確認しながら今後

は取り組んで欲しいと感じます。

競技は44名中標準時間内完成が16名、打切時間内に完成が36名、未完成8名でした。上位選手は僅かな点数を競う結果で、金賞1名、銀賞3名、銅賞3名、敢闘賞7名となりました。

上位選手は隔て板にもきちんと対応して非常に精度が高く、素晴らしい作品が出来ていました。

相当な練習と指導者の皆様の熱心な指導の賜と思います。また、3名の女性選手がいずれも作品を完成させ1名は昨年へ続き敢闘賞に輝いた事は特筆すべき事と思います。全管連ジャーナル2022年1月号で「生きがい・働きがいのある魅力ある職場づくり」として全管連技術参与で元技能五輪国際大会配管職種エキスパートの阿部弘之氏が全管連支援業務の一環として技能五輪技能指導会講師として広島・香川での指導の様子が報告されています。この指導会に選手達が参加されたしていたことを全管連ジャーナルを見て知り、そういえば彼らは頑張っていたなと思い出されました。選手たちは競技を通じて多くの発見と学びと充実感を得たと思います。これは働きがい、生きがいにも繋がる事です。出来ない事が出来るようになり、困難な作業を乗り越えたことは自信に繋がったことでしょう。難しい仕事も任される様になれば信頼も評価も上がり楽しくなるでしょうし、人



優勝した石井選手作品

材確保に結びつく事も期待できます。業界のこれからを担っていく若い配管工達が逞しく輝いて見えました。

さて今後の課題の改変にも触れていきたいと思いますが、現在の課題が時代に合っていない部分が有り変化する必要性を競技委員一同感じております。予算の関係などもあることから何でも出来るわけではありませんが、少しずつ時代に合った、また実際の配管作業に合った課題に修正していく事は選手達が現場で実際に仕事に取り組む為にもなる事と思いますので積極的に取り組んで参りたいと思います。もっと気軽に五輪に取り組み、競技に出る事の意義・達成感・喜びなどがより伝われば多くの参加者になるのではと思います。来年はコロナによる

制限が無くなりより素晴らしい技能五輪になる事を祈念いたします。

最後に本大会主催の厚生労働省、中央職業能力開発協会、競技の運営に尽力いただきました全国管工事業協同組合連合会、東京都管工事工業協同組合、埼玉県管工事業協同組合連合会、神奈川県管工事協同組合連合会、愛知県管工事業協同組合連合会、(一社)日本空調衛生工事業協会、そして何より選手を出場させて頂きました企業、学校、ご家庭の皆様にご挨拶を申し上げます。